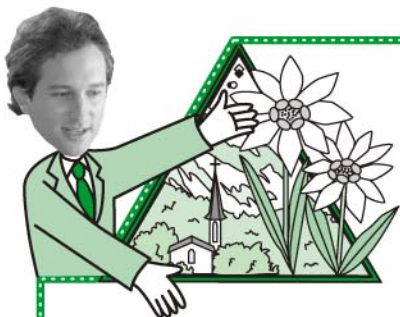




クリストフ・ソーターの 「ビヤーンヴェニユ・アン・スイス」

投扇興（とうせんきょう）

9月8日に鏡野町郷公民館の文化講座に参加しました。郷公民館の講座では子供たちが日本の文化の豊かさを認めて、色々な体験が出来る講座です。今回は江戸時代に由来する遊び、「投扇興」を子供たちと一緒にやってみました。スイス人なら、「投扇興」と言うのは知らないで当然だと思っていたけど、日本人の知り合いに聞いてみても、大多数の人は知らないらしくて、びっくりしました。今回は「投扇興」の遊びを皆さんに紹介し、自分の体験について書きたいと思います。まず、「投扇興」というのはなんでしょうか。



かろうじて知っている人でも、「投扇興」というのは「芸者のお座敷遊び」や「平安時代の貴族の遊び」などとよく思われていますが、実際は「平安調の遊び」の雰囲気としても、起源は江戸時代です。その時に、ある人が昼寝していたところ、ふと目を覚ますと、離れた木枕に蝶が休んでいました。気づくと、その人はわきにあった扇を蝶に向かって投げました。そうすると、蝶はひらひらと飛び去ると同時に扇子もひらひらと舞って、木枕の上に乗りました。乗る様子が面白いと思って、中国から伝来した投壺（とうこ）という遊びによく似ていて、これが元になり「投扇興」になったようです。座敷芸として江戸時代から明治時代まで人気があって広がりましたが、その後は段々廃れました。雅であるということによって、戦後に復興されました。平成になってからは、日本の伝統遊技の一つとしてマスコミなどに取り上げられ、ブームになっています。



やり方については、2人で競う対戦です。桐箱の台座（枕）上に「蝶」と呼ばれる的を立て、約1メートル（畳一帖）の距離から開いた扇を的に向かって投げます。その扇と的の落ちた形によって点数を算出し、勝敗を決めます。やってみると、やはり思っていたより難しかったです。扇子の持ち方と投げ方は重要だし、入った力も大きな影響を与えます。子供たちは競い合って、何回も的に当たりましたが、私は全然当たらず、的に当たるまで頑張ろうとしました。4対戦目で、やっと的に当たり、嬉しかったです。

今回、郷公民館の講座に参加して、本当に良かったと思います。今まで、聞いたことがなかった日本の文化の一つを体験し、こういう講座があればまた是非参加したいと思います。そして、日本に暮らしても、まだ知らないことが多いと思いました。スイスの文化と全く違って、帰国したらこんな話を伝えたいなと思いました。郷公民館の館長さん、今回教えてくださった先生、そして一緒に参加してくれた子供たち、ありがとうございました。

では、皆さん、フランス語の言葉を忘れないように終わりにしましょう。今回は「Quel est votre nom? ケ・レ・ヴォトル・ノン?」「お名前は何か?」を覚えておきましょう。

また来月、よろしくお願いします。